

HIV／エイズとともに生きる子どもたちの治療を妨げる数々の障害。その障害を克服することは簡単なことではない。2004年に、ユニセフとそのパートナーは、HIV／エイズとともに生きる子どもたちの問題を世界的な課題として訴えることに力を入れた。

HIV／エイズ

ラ・メゾン・アルクアンシエル（虹の家）は、ハイチのポルトープランスの丘陵地帯にある施設である。HIV／エイズの影響を受けた子どもたちを保護し、エイズとともに生きる子どもたちに抗レトロウィルス薬を提供している場所でもある。ユニセフの支援のもと、地元の非政府組織によって運営されているこのセンターは、HIVに感染している子どもたちが適切な治療を受けられるように、その権利を守ろうと努力するユニセフの活動の一例である。抗レトロウィルス薬は、HIVが引き起こす病気を減らしたりエイズによる死亡率を下げるることはできるが、途上国でこの治療を受けることができるのは、治療を必要とする人々のうち、推定12%にすぎない。HIV陽性の世界の220万人の子どもが抗レトロウィルス治療を受けられる可能性は、おとなよりもさらに低くなる。





HIV／エイズとともに生きる子どもたちのためのケアや支援、治療が制約を受けている理由はいくつかある。ウイルスが子どもたちの身体の中でどのように働くのか、いまだに正確に把握されていない。子どものための検査機関や保健施設も不十分なままで、抗レトロウィルス薬も手に入らないか、たとえあったとしても価格が高すぎて手が届かないことが多い。子どもに適した抗レトロウィルス治療薬があったとしても、費用が高すぎる上に保管が困難で、投与が難しすぎるのだ。それでもなお、ほかの感染者や患者と同様に、子どもたちにも治療を受ける権利があることに変わりはない。

遊ぶ力

ユニセフはハイチにおいて、抗レトロウィルス薬を提供するコミュニティ中心のプログラムを2つ支援しているが、アルクアンシエルはそのひとつである。もうひとつは北西部の都市ポルデペにあり、ケア (CARE)によって運営されている。これらのプログラムでは、検査、カウンセリング、栄養・医療面の支援、心理社会的支援を、戸別訪問を通じて行っている。アルクアンシエルは、デルマールというポルトープランスのスラム地区でも関連プログラムを実施しており、ここではHIV／エイズの影響を受けている子ども、家族、ケア提供者が、抗レトロウィルス薬を含む支援やケアを受けることができる。2004年、アルクアンシエルは、国連エイズ合同計画 (UNAIDS)により、優秀な実践例として認定された。現在、このモデル事業を拡大し、都市部に導入するための作業が進行中である。

この事業の焦点は、HIVウイルスの影響を受けた子どもたちを支える第一線である家族やコミュニティを支援することにある。その成果は子どもたちに現れている。治療を受けた子どもたちは、遊ぶだけのエネルギーが出てくる。学校にも通えるようになる。多くは未来への希望や夢を持つようになる。端的に言えば、子どもたちは再び子どもに戻ることができる所以である。

現場の声から…

ステファン

ステファン（仮名）は11歳。ハイチのラ・メゾン・アルクアンシエルには6年前から住んでいる。HIV陽性で、抗レトロウィルス治療を受けている。

「ここにはもう6年いる。薬は飲みたくないけれど、看護師さんが飲まなければいけないというから、しかたなく飲んでいる」

「機械工になって、自分で大きな車を作りたいんだ。そして、飛行機に乗ってブラジル、カナダ、日本に行きたい。地理の時間に習っ

たよ。テレビでも見た。車をつくって、サッカーをして、チームを作りたいんだ」

ジュリアナ

ジュリアナ（仮名）はお母さんのお腹の中にいるときにHIVに感染した。18歳になった今、彼女はブラジルのサンパウロのHIV／エイズとともに生きる子どもと若者のための家に住んでおり、抗レトロウィルス薬をもらいながら、将来の計画を立てている。

「私は、5歳になるまでは母親と妹と暮らしていたんです。妹が家族で一番年下でした。

時間がたつにつれ、母の具合はとても悪くなっていました。エイズを発症したんです。お母さんが苦しむ姿を毎日見ていたので、妹も私も本当に辛かったです。でも、見ているだけで何もできませんでした」

「お母さんは私たちのことを心配して、友だちに私たちの面倒を看てくれるよう頼んでくれました。最初は、お母さんと別れるのがあまりに辛かったのでずいぶん泣きました。お母さんの病気がひどくなるにつれ、一番上の兄と父親だけが家に残りました」



抗レトロウィルス薬の調達が大幅に増加

ユニセフの抗レトロウィルス薬と検査・診断用器具の調達は、2004年度に大幅に増加し、総額にして2,600万米ドル（2002年度は400万米ドル）になった。こうした薬の一部は、ユニセフが支援するアルクアンシエルのようなプロジェクトに回ったが、ほとんどはエリザベス・グレーザー小児エイズ財団、国連開発計画のような機関に対する調達サービスの一環として提供された。ほかにも主要なところではコロンビア大学が主導する母子感染予防「プラス」プログラムがあり、このプログラムではアフリカ南部の8カ国とタイで、包括的なケアと継続的な抗レトロウィルス治療を、母子をはじめとする家族に提供している。ユニセフが2004年度に調達した、すべての抗レトロウィルス薬の80%以上、検査キットの75%以上はアフリカに行った。

「私が6歳で妹が5歳のとき、面倒を看ていてくれた女性が、家が苦しくなってしまったので、これ以上面倒をみることができない、と言いました。代わりにシェルターを探してくれると言ったんです。この女性はとても親切してくれて私たちもとてもなついていたので、彼女と別れるのはほんとうに辛かった」

「そうこうするうちに、私のほうがひどく体調を崩して病院に連れて行かれました。7歳になっていましたが、体の具合があま

りに悪いので入院することになったのです。病院の中で、1年間、生と死の間をさまよいました。妹のほうはシェルターで預かってくれることになりました」

「私も1年後に病院を退院して、妹と同じシェルターに入りました。最初のうちは、体力がなかったので車椅子生活。それでもシェルターでは多くの人たちが私を助けてくれたので、とても幸せでした」

「治療薬をもらっていたのですが、正しく

服用していなかったので、いつも調子を崩していました。そんな具合で毎年、病院に行っていました」

「ある日、私を養子にしたいという女性と病院で出会いました。妹と一緒に、この女性の家で週末を過ごすようになりました。妹は養子になりたい、というので彼女の養子になりましたが、私はそうしたくなかったので、結局、別のシェルターに預かってもらうことになりました。妹は中等学校の2年生でとても幸せに暮らしていますが、

治療を効果的にするには、薬を継続的に提供し続ける必要があるため、ユニセフは抗レトロウィルス薬の緊急ストックを160万米ドル分備蓄し、医薬品が不足した国に提供できるようにした。

ユニセフは、国連エイズ合同計画や世界保健機関（WHO）の「2005年までに300万人を」イニシアティブを支援している。これは2005年末までに、開発途上国の300万の人々が治療を受けられるようにするというイニシアティブである。2004年11月、ユニセフはWHOと共に、子どもたちがどれほど抗レトロウィルス治療を利用できているか、現状を分析する技術会議を共催した。

HIV／エイズは子どもの権利の実現に大きな影響を与えてきた。約1,500万人の子どもがHIV／エイズにより孤児となり、HIVウィルスが貧困、武力紛争、知識の欠如、ジェンダーによる差別を悪化させてしまうために、さらに数百万人の子どもたちが困難な状況に陥っている。エイズはあまりにも多くの場所で子どもたちに犠牲を強いている。母親と子どもに対する治療の推進は、この現状に効率的に対応するため必要とされる、膨大な努力のほんの一部にすぎない。

ユニセフのプログラムは、若者の間のHIV感染、HIVの母子感染を防ぎ、孤児やHIV／エイズと共に生きる、困難な状況にある子どもたちとその家族に、支援とケア、治療を提供することを目的としている。世界で行われているユニセフの活動と成果の一例を次のページに挙げる。

支援の一例

2004年に、ユニセフは：

- ・1,840万米ドル相当の抗レトロウィルス薬を調達した。
- ・290万米ドル相当のHIV／エイズ関連の検査キットと診断用器具を提供した。

私のことをとても心配してくれています」

「母はもう亡くなりました。父親はバヒアに引越し、一番上の兄からの音信は途絶えました。妹は17歳で、養子縁組した女性と一緒に暮らしています」

「昨年、テセル・オ・フトゥロ（未来を織るという意味）という事業（HIV／エイズとともに生きる子どもや若者を支援するユニセフのプログラム）に出会いました。若者

たちとのミーティングに参加するようになり、とても助けられました」

「私は今、18歳。素敵な家に住んでいるし、みんな親切にしてくれるのでとても幸せです。でも私の目標は学校を卒業して、仕事を見つけ、自分の家を持つこと。今は中等学校の3年生です。上手に自己管理をするよう努力していますし、治療もちゃんと受けています。今考えていることは将来のことだけです」 ■



აი გადაეცემა:

ეფი კონტაქტით, როგორც მომ, ისე ჰერიტენსექსური, ანალური, ორალური; იუპული სისხლის ან მისი ცალკეული კომპონენტებით იუპული სისხლით დაბინძურებული შპრიცის, ნემუკიცინო ინსტრუმენტების გამოყენების შემთხვევაში; კირკული დეფისან ნაცოფზე ან ახალშობილზე მოადში, მშობიარობის ან ძუძუთი კვების დრო.

ვირუსი არ გადაეცემა:

ერ-ცვეთოვანი

აუგ

ჩარ

თერ

აივ

აგია

ჩაუს

აივ

イラン・バム市

「この子たちの生活を再建することは、緊急支援活動であると同時に、長期にわたる支援でもある。私たちはその両方のためにここにいる」

2003年12月26日、地震がイランのバム市を襲ったとき、何万人もの子どもたちが、本来は子どもが目撃してはならないことを目撃してしまった——自分たちの暮らす世界が、音を立てて崩れ落ちてしまったのだ。心に受けた傷があまりにも大きすぎて、自分の名前さえ言うことができない子や、両親の顔すら認識できなくなってしまった子もいた。バム市の子どもたちは、緊急に、非常に多くの対策を必要としていた。

およそ3万人の命が失われ、2,000人近くの子どもが両親を、その2倍近い数の子どもが一方の親を亡くした。この自然災害は街の病院2カ所と23カ所の保健センターすべてを破壊した。バム市の保健員の半分以上が死亡し、街の学校のほとんどが壊れ、多くの教師や生徒が死亡、または行方不明となった。

長年にわたる支援の実績がもたらした大きな成果

緊急支援計画の策定と実行にあたって、この国に関する深い知識が役に立った。ユニセフは1962年以来、ほぼ途切れることなくイランの子どもたちのために支援事業を続け、現地の地元機関、地域機関、国際機関との間にも強い絆が育まれていたのである。

ユニセフからの最初の支援物資は48時間以内に現地に到着し、亡くなった数千の方々を埋葬できるように直ち

に支援が始められるとともに、地震を生き残らえることができた8万人の人々に、命を支える水、医薬品、身の回りの生活道具、テント、発電機を提供した。ユニセフは、家族と離れ離れになってしまった子どもたちを見つけ出し、生き残った親類縁者たちとの再会を手助けした。

負傷者や病人の治療が当面の山場を越え、汚染に対する対策や家を失った人々、家族と離れ離れになった人々への対応がひと段落した後に残ったのは、悲観的な心理や絶望感、自信の喪失、気分の落ち込みや無気力といった、より長期にわたって人々を脅威に晒すものだった。だが、残ったのは脅威ばかりではない——ユニセフもまた、この地に留まつたのである。

教育——緊急支援の一環として、また長期の事業として

ユニセフの緊急支援事業の重要な部分を占めていたのが、たとえ自然災害の被害を受けても、すべての子どもたちが教育を受ける権利を持っていることを訴えたアドボカシー活動であった。バム市の教育分野において先頭に立つて活動する国連機関として、ユニセフは政府機関と非政府組織双方の教育面での活動の調整役にあたった。

地震直後、1張50人の子どもたちが勉強できる、空気で膨らますタイプのテントとレクリエーション・キット、何百セットものスクール・イン・ア・ボックス（教育キット）が送り込まれた。地震から1カ月もたたないうちに、子どもたちは公立の学校に戻り始め、ユニセフの支援で臨時に作られた最初の学校が完成して子どもたちを受け入れ始めたのである。

ユニセフはまた政府と連携して、4カ所の学校で心理社会的支援プログラムをスタートさせた。1,200名を超える教師が、心にトラウマを抱えた子どもを見分け出し、適切な対応をとることができるよう研修を受けた。

2004年度を通じて、バム市への教育支援は続いた。若者は、大学準備コースに参加できるよう支援を受け、教師は初等学校と中等学校でのライフ・スキルの教え方について研修を受けた。乳幼児総合ケアセンターもバム市内と近郊に作られ、そのほかに子どもたちのためのレクリエーション・センターも作られた。地震後1年がたっても、再建はまだ充分ではない。バム市の2万4,000人の子どもたちの多くはプレハブの学校に通い、それもシフト制のクラスで学ばなければならない状態にあった。巡回型の図書館が56校を車で巡って子どもたちにサービスを提供している状態である。心理面の支援、および水と衛生分野の事業も引き続き行われている。

瓦礫の街から、子どもにやさしい街へ

復興支援は、子どもにやさしい街、というコンセプトに基づいて進められている。持続可能で健康的、かつ子どもにやさしい環境を推進しようという取り組みである。地震から1年以上。多くのものを失い、混乱と再生を経験したバム市の子どもたちは、ユニセフの支援から多くの恩恵を受けている。



カリブ海諸国

「何千人の子どもたちが嵐の被害を受けている。命を落とした子、負傷したたくさんの子ども、さらに数千人の子どもが家や学校が破壊されるのを目の当たりにした」

自然災害と人が作り出した危機——洪水、複数のハリケーン、政情不安——は、2004年、カリブ海諸国に特に大きな影響をもたらした。子どもたちがその中でも一番の犠牲者となり、家や学校を失い、今までどうにか手に入っていた安全な飲み水、衛生、保健、社会サービスも手に入らなくなってしまった。

混乱が起きるたびにいろいろなことを学んできたユニセフは、パートナーと共に、影響を受けた国々——特にドミニカ共和国、グレナダ、ハイチ、ジャマイカ——の支援を行ったが、その際には、各国のネットワーク力、機関間の協力体制、政府のインフラ状況によって支援内容を変えた。ユニセフは1年を通じて、「緊急事態下にある子どもたちに対するユニセフの主な活動」を何度も実際に移してきた。

子どもの健康を守り、学習を継続できるように支援する

子どもたちの健康を守り、学校に戻す作業には、国連機関——例えば、汎アメリカ保健機構（PAHO）、世界食糧計画（WFP）など——や多くの国際機関、セーブ・ザ・チルドレン、アクション・アゲンスト・ハンガーなどを含む地元の非政府組織などの強力なネットワークが必要であった。

救急キット、緊急保健キット、経口補水塩（ORS）は、ジャマイカの子どもたちの健康を守るために役立った。ハイチでは、損害を受けたコールドチェーン器材を入れ替え、栄養保健キットを提供した。ドミニカ共和国では、5歳未満の子ども向けの衛生キット、ならびに栄養保健キットを提供。グレナダの医療機関にも、保健キットに加えてORSや浄水剤、トラウマ対応キットが配られた。このほか、多くの地域で浄水剤が配られた。

子どもたちを学校に戻すには大変な努力を要した。グレナダでは、ハリケーン・イワンによって78校の学校が一部損壊、あるいは全壊の被害を受けた。ユニセフからはスクール・イン・ア・ボックス（教育キット）が配られ、国際サッカー連盟（FIFA）からはスポーツ・イン・ア・ボックスのキットが送られた。テントが臨時の学校となり、被害を受けた学校は修復された。ハイチでは、バック・トゥ・スクール・キャンペーンにより学校の修復が行われ、スクール・イン・ア・ボックスなどの勉強に必要な資材が提供された。こうした緊急教育キットは、ジャマイカの子どもたちが学校に戻る際にも役立てられた。



ドミニカ共和国とグレナダでは、「幸せに戻ろう」プログラムが展開され、遊び、スポーツ、劇、お話し会などを通じて、子どもたちがトラウマに対処できるよう支援した。ドミニカ共和国では、ワールド・ビジョンがこのプロジェクトの重要なパートナーとなった。グレナダでは、既存の基礎保健サービスにカウンセリングが加えられた。

ハイチ

ハイチの子どもたちもまた、人災との闘いを強いられた。年度始めに起きた政情不安は暴力の波を引き起こし、推定300万人に影響を及ぼした。そのうちの半分以上は子どもであった。危機の複雑さと規模の大きさは緊急支援を困難なものにし、ユニセフが緊急支援時の重点課題をどこまで実行できるかを試す試金石となった。

子どもたちを学校に戻すために、バック・トゥ・スクール・キャンペーンを通して、学校を修復し、9万人以上の子どもと2,000人の教師を対象に学用品・教育用資材が提供された。

もっとも困難な状況にある子どもたち、路上で生活する子どもたち、家事労働に携わる子どもたち、エイズによる孤児を保護するために、ユニセフは職業訓練、教育、能力育成などの支援を行った。女性や女子に対する暴力の増加を受けて展開されたキャンペーンでは、どこに行けば助けを求めることができるか、といった情報を提供了した。

子どもが紛争によるトラウマを克服することができるよう、政府、民間部門、国際社会は、もっとも被害の大きかった地域の貧困層の家庭の子ども 1万5,000人に対して奨学金を支給した。このプログラムのおかげで、800人以上の若者たちがトラウマ支援を受けることができた。